

幼児の習い事に関する研究 —性差に着目した考察—

別 府 さおり*
阿久根 雅**

A Study about Lessons for Preschool Children —An Inquiry Focused on Gender Differences—

Saori BEPPU
Miyabi AKUNE

I. 問題と目的

幼児教育や早期教育の功罪に関する多方面からの研究が行われて久しいが、その中で、習い事に対する取り組みの様相も明らかになっている。

幼児の習い事についての調査では、特に幼稚園児において習い事をしている割合が高いことが示されている。伊藤・鳥原（2000）の調査では182名のうち62.1%、住田・山瀬・片桐（2012）の調査では433名のうち66.4%、ベネッセ総合教育研究所（2015）の調査では533名のうち73.0%もの幼稚園児が習い事をしており、いずれも保育園児に比べ高い割合であることが明らかになっている。園の保育時間や生活の様子を鑑みても、幼稚園児の方が習い事をしやすい環境にあると言えるが、教育機関である幼稚園を利用しながら、さらに習い事という早期教育に取り組んでいる幼児の方が多く、早期教育に力を入れている幼稚園児の保護者は少なくないと考えられる。

習い事を始める理由について伊藤・鳥原（2000）は、「子どもが希望するから」が最も多く、子どもが自発的に習い事をしているケースが多いことを示した上で、ピアノなどの情操教育やスポーツ系の習い事に比べ学習塾や英会話は親の側が必要を感じて選択していることから、運動面や情操面での習い事は子どもの希望が優先されるが知能面での習い事には親の期待が反映されていると考察している。

成田は1997年と2013年に、短期大学生とその保護者を対象に習い事についての調査を実施し、2回の調査結果を比較検討している。2013年の調査では習い事を始めたきっかけが自分（子ども）の意思であった割合が減少する一方、親など大人に勧められた（保護者の意向であった）割合は増加していることを明らかにし、早期教育を行うにあたって子どもの意思、意見を聞くことの重要性を示唆した

*Saori BEPPU 福祉心理学科（Department of Social Work and Psychology）

**Miyabi AKUNE 株式会社ケアサービス（Care Service Co., Ltd.）

(成田, 2013)。

また現在、核家族化により家庭の外での保育、教育を活用し期待をかける保護者が増加する傾向に加え、少子化の進行に伴い、少ない子どもに期待をかけ大切に育てたいと思う気持ちが強くなっていると考えられ、保護者が習い事にかかる期待もより高まっていることが推察される。そのような中で、習い事をするか否か、どんな習い事をするかなどは、幼児自身よりも保護者の価値観や意識により左右されるようになってきているのではないだろうか。

ところで、幼児期の教育は人間形成の基盤を培う重要なものであるが、社会的・文化的性であるジェンダーが幼稚園や保育園での保育、教育場面で隠れたカリキュラムとして物的・人的環境において用いられている実態が明らかにされている (eg. 森・川田・善本・坂田, 1998; 金子・青野, 2004)。

では、習い事においてはどうかだろうか。森・坂田 (1999) によると、保育士より保護者の方が、性差を肯定し性差別の傾向があるという調査結果が示されている。習い事に保護者の価値観や意識が反映されているとすると、熱心に取り組まれている習い事においてジェンダーが再生産されている可能性がある。

そこで本研究では、幼稚園に在籍する幼児の習い事の実態を明らかにし、その中で性差に関連すると判断されるものを取り上げ、考察を試みることにした。

汐見 (1996) は、乳幼児教育産業を「『教室』を開いて生徒と親を集め、その場でなんらかの教育活動を展開するもの」、「通信添削の形で定期的に教材や参考資料を送り、家庭で親に教育活動を展開させるもの」、「まとまった教材を家庭訪問販売や通信販売で売り、親に教育させるもの」、「その他」の4つに分類している。本研究では、この4分類の一つ目を適用し、家庭の外での教育活動に参加するものを「習い事」とした。

II. 方法

(1) 調査協力者

千葉県八千代市にある幼稚園に在籍する4歳から6歳の園児の保護者であった。規模と立地を考慮して選択した3園に調査協力を依頼し、430名に質問紙を配布し261名から回答を得た (回収率60.7%)。そのうち、記入の不備があった1名を除いた260名を分析の対象とした。

(2) 調査方法

各幼稚園の担任教諭から園児を通じて保護者に質問紙を配布し、園児を通じて担任が質問紙を回収した。

(3) 調査期間

2016年10月から11月であった。

(4) 調査内容

質問紙の内容は、習い事の有無及び内容、習い事を始めた理由、習い事に対する満足度などであった。質問項目は、伊藤・鳥原 (2000) の調査、ベネッセ教育研究所 (2015) 「第5回 幼児の生活アンケート」及びベネッセ (2008) 「第3回 子育て生活基本調査 (幼児版)」を参考に作成した。

(5) 分析方法

習い事の有無の年齢及び性別による違いを検討するため、 χ^2 検定を実施した。それ以外の項目については単純集計を行い、習い事をしている者について性差の観点から幼児のジェンダー研究の知見をもとに考察を加えた。なお、一部に未記入の項目があったため合計が一致しない場合がある。

III. 結果と考察

1. 調査協力者と幼児の属性

協力者は母親259名、父親1名であり、幼児の性別は男児121名、女児139名であった。幼児の年齢は4歳児37名、5歳児144名、6歳児76名であり、平均年齢は5歳6ヶ月（4歳0ヶ月～6歳8ヶ月）であった。きょうだいの人数は、2人きょうだいが最も多く（148名）、次いで3人きょうだい（64名）、一人っ子（33名）、4人きょうだい（12名）、5人以上（2名）の順であった。

2. 習い事の実態

(1) 習い事をしている人数

表1に習い事の有無と全体及び年齢別・性別の人数と割合を示した。習い事をしている人数は174名（66.9%）、していない人数は86名（33.1%）であった。年齢と性別による習い事の有無の違いを検討するために χ^2 検定を実施した。その結果、5歳児において性別による偏りが有意傾向（ $\chi^2=3.800$, $df=1$, $p<.10$ ）、6歳児において性別による偏りが有意（ $\chi^2=9.589$, $df=1$, $p<.05$ ）であった。以上の結果から、5歳児、6歳児では、女児は男児に比べ、習い事をしている割合が高いことが示された。

表1 習い事の有無と全体及び年齢別・性別の人数と割合

習い事の有無	全体 (人数・ 割合)	年齢別・性別(人数・割合)					
		4歳(n=37)		5歳(n=144)		6歳(n=76)	
		男	女	男	女	男	女
している	174 (66.9%)	10 (47.6%)	8 (50.0%)	41 (59.4%)	56 (74.7%)	17 (54.8%)	39 (86.7%)
していない	86 (33.1%)	11 (52.4%)	8 (50.0%)	28 (40.6%)	19 (25.3%)	14 (45.2%)	6 (13.3%)

(2) 習い事の内容

表2に習い事の内容と、全体の人数、開始時の平均年齢、年齢別・性別の人数を示した（複数回答可）。

全体では、スイミングが48名で最も多かった。伊藤・鳥原（2000）、住田・山瀬ら（2012）、ベネッセ総合教育研究所（2015）のいずれの調査でもスイミングは上位であり、ほぼ一致した結果となった。次いで多かったのは、体操の42名であった。後述の「習い事を始めた理由」にある「能力を伸ばすため」「体を丈夫にするため」という回答から、保護者のスポーツ関係の習い事への期待が大きいことが推察された。

年齢別にみると、年齢が上がるにつれ習い事の種類が増えていることが示された。開始時平均年齢は4歳代が最も多かった。リトミックのみ3歳代で、発達の基礎になる力を育てる目的で早期から開始すると考えられた。一方、そろばん、書道、絵画・造形といった巧緻性がより求められる習い事は他の習い事に比べ開始年齢が遅く、また学習塾は、小学校への進学を見据えて平均年齢5歳代から開始すると考えられた。

表2 習い事の内容と全体の人数、開始時平均年齢及び年齢別・性別の人数

習い事の内容	全体 (人数)	開始時 平均年齢 (歳)	年齢別・性別(人数)					
			4歳		5歳		6歳	
			男	女	男	女	男	女
スイミング	48	4.4	1	1	15	16	5	10
体操	42	4.6	4	1	9	16	2	10
楽器(個人・グループでのレッスン)	22	4.5	1	1	2	8	1	9
サッカー	17	4.9	4	0	5	0	7	1
英会話などの語学教室	17	4.2	0	1	3	6	1	6
ダンス	15	4.3	0	1	0	7	0	7
音遊び・リズム遊び(音楽教室)	15	4.4	0	2	0	8	2	3
受験目的ではない学習塾や計算・書き取りの塾	12	5.1	0	0	2	4	1	5
リトミック	6	3.5	0	2	2	1	0	1
バレエ	5	4.9	0	0	0	5	0	0
そろばん	4	5.4	0	0	0	0	1	3
武道・武術	3	4.4	0	0	3	0	0	0
野球	3	4.3	0	0	1	0	2	0
書道	3	5.7	0	0	0	2	0	1
絵画・造形	2	5.8	0	0	1	0	0	1
バスケットボール	1	未記入	0	0	1	0	0	0
幼稚園や小学校受験のための塾	0	-	0	0	0	0	0	0

性別では、サッカーは男児に多く、楽器、語学、ダンス、音楽教室、バレエは女児に多かった。性別による習い事の内容の違いがあることが示された。

(3) 習い事の回数

表3に1週間の習い事の回数と、全体の人数、年齢別・性別の人数と割合を示した。

表3 1週間の習い事の回数、全体の人数及び年齢別・性別の人数と割合

習い事の回数	全体 (人数)	年齢別・性別(人数・割合)					
		4歳		5歳		6歳	
		男	女	男	女	男	女
1回	105	7 (70.0%)	4 (66.7%)	31 (81.6%)	32 (60.4%)	11 (68.8%)	20 (51.3%)
2回	41	2 (20.0%)	2 (33.3%)	4 (10.5%)	15 (28.3)	5 (31.3%)	13 (33.3%)
3回以上	16	1 (10.0%)	0 (0.0%)	3 (7.9%)	6 (11.3%)	0 (0.0%)	6 (15.4%)

1週間の習い事の回数は、1回が最も多く、次いで2回、3回以上であった。習い事の回数が週1回である幼児の割合は6歳女児が最も低く、女児において年齢が上がるにつれ週あたりの習い事の回数が増えていることが示唆された。

(4) 習い事を始めた理由

表4に習い事を始めた理由と、全体の件数、年齢別・性別の件数と割合を示した(複数回答可)。

習い事を始めた理由は「本人の意思」が最も多く、全体の半数以上が選択していた。また、「保護

表4 習い事を始めた理由と全体の件数及び年齢別・性別の件数と割合

習い事を始めた理由	全体 (件数・ 割合)	年齢別・性別(件数・各群における全回答数に対する割合)					
		4歳		5歳		6歳	
		男	女	男	女	男	女
本人の意思	96 (55.2%)	7 (70.0%)	4 (50.0%)	14 (34.1%)	36 (64.3%)	11 (64.7%)	24 (61.5%)
能力を伸ばすため	31 (17.8%)	1 (10.0%)	3 (37.5%)	11 (26.8%)	7 (12.5%)	3 (17.6%)	6 (15.4%)
体を丈夫にするため	30 (17.2%)	2 (20.0%)	0 (0.0%)	12 (29.3%)	10 (17.9%)	3 (17.6%)	3 (7.7%)
きょうだいがやっているため	28 (16.1%)	1 (10.0%)	1 (12.5%)	5 (12.2%)	11 (19.6%)	1 (5.9%)	9 (23.1%)
保護者の意思	20 (11.5%)	1 (10.0%)	3 (37.5%)	8 (19.5%)	3 (5.4%)	1 (5.9%)	4 (10.3%)
友達を作るため	3 (1.7%)	0 (0.0%)	1 (12.5%)	0 (0.0%)	2 (3.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
その他*	1 (0.6%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (2.4%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

* その他の具体的な内容:「友人に誘われたため」

者の意思」のうち、具体的な内容として「親の希望」(4件)が挙げられた一方、「子どもに合っている」(8件)、「水嫌いにならないため」(2件)、「体調的問題」(1件)といった回答も挙げられており、必ずしも保護者の一方的な思いだけで習い事をさせているわけではないと考えられた。

いずれの年齢においても、男児は女児に比べ「体を丈夫にするため」という回答の割合が高かった。青野・金子(2008)は、保育士を対象にした調査で、男性に対したくましさ、行動力といった伝統的な男性像が期待されていることを示した。また、田中・佐藤(2002)は、伝統的性役割観を内面化している保護者は「男の子」の特性を強さ、たくましさ、元気さ、活発さと捉え我慢強さ等を求める傾向にあり、子どものしつけにおいてジェンダー再生産に寄与しやすいことを指摘している。本調査の結果は、保護者が子どもに期待する姿が子どもの性別により異なること、男児に対して期待される男性像が反映された可能性があることを示していると考えられる。

(5) 習い事をさせた結果、幼児が成長したこと

表5に、習い事をさせた結果、幼児が成長したことの内容と全体の件数、年齢別・性別の件数と割合を示した(複数回答可)。また、表6に、習い事をさせた結果、幼児が成長したことの「その他」の内容とカテゴリー及び件数を示した。述べ28件の回答を、内容の類似性をもとにカテゴリー化した。

「習い事を始めた理由」では、「能力を伸ばすため」という回答は31件であったが、習い事をさせた結果「技術・正しいやり方が身についた、上手になった」という回答が132件と最も多く、習い事の内容そのものを身につけ成長している幼児が多いと言える。また、同じく「習い事を始めた理由」の「体

表5 習い事をさせた結果、幼児が成長したことの内容、全体の件数及び年齢別・性別の件数と割合

成長したこと	全体 (件数・ 割合)	年齢別・性別(件数・各群における全回答数に対する割合)					
		4歳		5歳		6歳	
		男	女	男	女	男	女
技術・正しいやり方が身についた、上手になった	132 (75.9%)	6 (10.0%)	7 (87.5%)	33 (80.5%)	43 (76.8%)	11 (64.7%)	32 (82.1%)
友達ができた	68 (39.1%)	3 (30.0%)	3 (37.5%)	13 (31.7%)	25 (44.6%)	4 (23.5%)	20 (51.3%)
体力がついた	58 (33.3%)	3 (30.0%)	1 (12.5%)	15 (36.6%)	16 (28.6%)	10 (58.8%)	13 (33.3%)
集中力が身についた	43 (24.7%)	4 (40.0%)	4 (50.5%)	6 (14.6%)	16 (28.6%)	4 (23.5%)	9 (23.1%)
その他**	23 (13.2%)	2 (20.0%)	0 (0.0%)	8 (19.5%)	3 (5.4%)	3 (17.6%)	7 (17.9%)

** その他の具体的な内容は表6に示した。

表6 習い事をさせた結果、幼児が成長したこと 「その他」の内容とカテゴリー及び件数

カテゴリー	主な記述	件数
目標を決め努力	「自分で目標に向かって努力することが出来るようになった」「自主練習をする」	4
人前での表現	「人前に入る経験をたくさんして、以前より自分を出せるようになった」「人見知りがなくなった」	4
社会性	「順番、ルールがあることを学んだ」「人の話を聞けるようになった」「社交性が身についた」	3
自信	「自分自身に自信がついた」「習得して自信をつけている」	3
やる気・達成感	「本人が達成感を持つようになった」「色々な事にやる気が持っている」	2
楽しみ	「楽しい予定(サッカー)がふえた」「朝は楽しみにして園に行く」	2
予定・生活リズム	「毎週同じ時間に定期的に自分で1週間の予定を考えられる様になった」「1週間を通しての生活リズムを意識出来る」	2
語学の成果	「自然に英語の単語や歌を口ずさんでいる」「表現する力がついた」	2
その他	「日常嫌がっていた事もがんばれるようになった」「いろいろなものに興味を持つようになった」「家での時間活用」	3
まだわからない	「まだ始めたばかりなのでわからない」	3

を丈夫にするため」という回答は30件であったのに比し、習い事を始めた結果「体力がついた」という回答は58件であった。これらの結果から、実際に習い事をさせた結果、子どもが期待した以上に成長していると保護者が感じていることが窺える。

いずれの年齢においても、男児は女児に比べ「体力がついた」という回答の割合が高かった。このことを、「習い事の内容」及び「習い事を始めた理由」と関連づけて考察すると、特に男児の保護者は「体を丈夫にする」ことを期待してスポーツ関係の習い事を選択し、全てが期待通りであるかは定かではないものの一定の成果が得られたと考えていることが窺える。しかし、男児の保護者が習い事の成果を評価する観点が、体力やたくましさといった伝統的な男性像として期待される側面に置かれていた可能性も現段階では否定できない。

女児は、いずれの年齢においても男児に比べ「友達ができた」という回答の割合が高かった。このことをジェンダーの観点から示す先行研究は見られなかったが、幼児期の社会的行動の発達は女児において著しいことから、習い事での他者との関わりを通して友達を作ることができるのは女児に多いことが推察される。

(6) 性差に関わる自由記述の分析

性差に関わると判断できる回答が、女児の保護者3名の自由記述において示された。

①保護者の期待

- ・「女の子なので字は上手になってほしい」(筆者注：書道を習っている女児)
- ・「基本的に小学校の間は、体を動かして友達と遊ぶ時間であり、宿題以外は極力やらせない。特に男の子(同：回答者の息子)。女の子(同：回答者の娘)は将来のコミュニケーションとしての習い事はありかなと思っている。」

以上2件の自由記述は、保護者の子どもに対する期待を示すものであるが、いずれも科学的根拠をもたない女性に対する偏見であるジェンダー・バイアスを示すものであると考えられる。

②習い事への参加制約

・「サッカーは、女子一人で、本人は気にしていないが、泊まりの合宿など参加が難しく、本人はイヤらしい。」

この回答は、性別による習い事への参加制約が存在することを示している。本件は指導体制上の制約が背景にあると推測されるが、男女共同参画社会が目指されることになって久しい我が国で、性別による制約が未だに存在することを示すものであると考えられる。

IV. 総合考察

本研究では、幼児の習い事について保護者を対象に調査を実施し、性差に着目した考察を中心に行った。

幼児の習い事におけるジェンダーを示した研究として、森・坂田（1999）は、女兒の習い事はピアノ、スイミングスクール、体操教室の順で多く、男児の習い事はスイミングスクール、ピアノ、体操教室の順で多いこと、また習い事をしている幼児の人数は、男児に比べ女兒が多いことを示し、保護者のジェンダー意識の表れを示唆した。また、伊藤・鳥原（2000）によると、習い事の数、週あたりの回数、費用のいずれも女兒に比べ男児が多かった。習い事の種類についても、男児はスポーツ系や学習塾・幼児教室が、女兒はピアノが多いことから、伸ばしたい能力の中心が男児は運動面と知能面、女兒は情操面に置かれており、ジェンダー・バイアスの形成に影響を与える要因の一つであると示唆している。

本調査では、習い事をしている幼児は5、6歳児において男児より女兒に多いことが示された。また、習い事の内容、回数、習い事を始めた理由、習い事をさせた結果、成長したことのいずれにおいても、性別による差異が認められた。先行研究を踏まえて考察すると、本研究の結果は、習い事を選択や幼児に対する期待に保護者のジェンダー観が反映されていることを示すものであったと言える。しかし、本調査では保護者のジェンダー観そのものは問うていないため、今後は習い事の実態と併せて追求して行くことが必要であろう。

一方、習い事を始めた理由で最も多かったのは「本人の意思」であった。子どものジェンダーについての知識はすでに2、3歳で習得され始めると言われている（Golombok & Fivush, 1994）。このことから、本研究において対象になった幼児自身がすでにジェンダー観に基づいた選択をしており、家庭や幼稚園をはじめとする生活環境の中でジェンダーが再生産されている可能性を示すものであった。

早期教育の一般化が進み、習い事をする幼児の割合も増加の一途を辿る現代において、習い事をジェンダーの観点から再考する必要があると考える。

謝辞

調査にご協力いただきました各幼稚園の先生及び保護者の皆様に心から感謝申し上げます。

附記

この論文は、阿久根雅著（2016）平成28年度東京成徳大学応用心理学部福祉心理学科卒業論文「幼児の習い事の実態と習い事に対する保護者の考え」に新たに分析、考察を加えたものである。

引用文献

- 青野篤子・金子省子 (2008) 保育にかかわる保護者のジェンダー観. 日本家政学会誌, 59(3), 135-142.
- ベネッセ (2008) 「第3回 子育て生活基本調査 (幼児版)」. http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kosodate/2008_youji/hon/pdf/data_11.pdf. (最終参照日: 2017年11月15日)
- ベネッセ総合教育研究所 (2015) 「第5回 幼児の生活アンケート」調査票. http://berd.benesse.jp/up_images/research/chousahyou201511.pdf. (最終参照日: 2017年11月15日)
- ベネッセ総合教育研究所 (2015) 「第5回 幼児の生活アンケート」集計表. http://berd.benesse.jp/up_images/research/shukeihyou1123.pdf. (最終参照日: 2017年11月15日)
- 藤田由美子 (2007) 子どもの「ジェンダーと身体」をめぐる意識構造. 九州保健福祉大学研究紀要, 8, 61-70.
- Golombok, S. and Fivush, R. (1994) Gender Development. Cambridge University Press, New York. 小林芳郎・滝野揚三訳 (1997) ジェンダーの発達心理学. 田研出版.
- 伊藤葉子・鳥原菜穂子 (2000) 習い事に対する親の意識. 千葉大学教育学部研究紀要, 48, 1, 111-122.
- 金子省子・青野篤子 (2004) 保育所・幼稚園におけるジェンダー・フリー—保育者・保護者インタビューと観察をもとに—. 日本保育学会大会発表論文集, 57, 568-569.
- 三村保子・力武由美 (2006) 保育・子育て実践における「個の尊重」—ジェンダーの視点から再考する—. 西南女学院大学紀要, 10, 143-152.
- 森隆子・川田富子・善本佳世子・坂田仁美 (1998) 保育のなかのジェンダーに関する一考察 (II) —保育者の実態から検討する—. 日本保育学会大会研究論文集, 51, 708-709.
- 森隆子・坂田仁美 (1999) 保育のなかのジェンダーに関する一考察 (III) —保護者の実態から検討する—. 日本保育学会大会研究論文集, 52, 416-417.
- 成田朋子 (2013) 早期教育のあり方について考える—保育科学生とその保護者への習い事についての回想調査に基づいて—. 名古屋柳城短期大学研究紀要, 35, 89-103.
- 汐見稔幸 (1996) 幼児教育産業と子育て. 岩波書店.
- 住田正樹・山瀬範子・片桐真弓 (2012) 保護者の保育ニーズに関する研究—選択される幼児教育・保育—. 放送大学研究年報, 30, 25-30.
- 田中享胤・佐藤和順 (2002) 幼児のしつけ形成過程にみるジェンダー再生産の装置—保護者を対象にした調査をもとに—. 兵庫教育大学研究紀要, 22, 1-9. URI:<http://hdl.handle.net/10132/858>